

Title	北島建孝氏蔵『すみよし本地』翻刻
Sub Title	
Author	宋, 春暁(Sō, Shungyō)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2022
Jtitle	三田國文 No.67 (2022. 12) ,p.143- 148
JaLC DOI	10.14991/002.20221200-0143
Abstract	
Notes	図削除
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20221200-0143">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20221200-0143</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 北島建孝氏蔵 『すみよし本地』 翻刻

宋 春暁

本書は、従来、島根県某家蔵本として知られていた『すみよし本地』である。『住吉の本地』とは、『住吉縁起』とも呼ばれる、室町末期から近世初期の成立とされる寺社縁起物である。現存諸本は、三系統に分類され、第一系統には慶應本、東大本、フランス本、第二系統には島根県某家蔵本とされてきた北島建孝氏蔵本、第三系統には國學院大本、大阪歴史博本が現存する。その内容は、以下のような住吉明神の靈験が語られる。

## 第一系統

- 1 天神七代、彦火々出見尊釣針探し等。
- 2 仲哀天皇の熊襲侵攻
- 3 神功皇后の三韓侵攻
- 4 草薙劍盜難事件
- 5 能《白楽天》説話
- 6 三種神器の盜難事件
- 7 蒙古襲来

## 第二系統

- 1 牛まじ説話
- 2 神功皇后三韓侵攻
- 3 李道王の兵法伝授

## 第三系統

- 1 仲哀天皇熊襲侵攻
- 2 神功皇后三韓侵攻
- 3 能《白楽天》説話
- 4 蒙古襲来
- 5 藤原純友の乱
- 6 源平合戦
- 7 後白河院の灌頂

三系統のうち、第二系統の現存諸本は、これ一冊のみである。主に、牛まじ説話、神功皇后の三韓侵攻、李道王の兵法伝

授等、他系統と異なる内容が記される。また、北島氏によれば、昭和五五（一九八〇）年に「自重館文庫」として整理され、数十の大箱に分類されていたが、本書が納められている大箱の所在が不明になったという。本稿は、その影印をもって翻刻したことを断っておく。書誌は以下の通りである。

- ・形態 横型奈良絵本 一冊。
- ・時代 〔七世紀後半頃か〕。

・題簽 すみよし本地。

・料紙 不明。

・寸法 縦一五・五糎、横二四糎。

・丁数 二六丁。

・挿絵 計五図。

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めたほか、私に句点・読点・「」括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかった。

## 【付記】

本書の翻刻の御許可を賜った北島建孝氏に深く感謝申し上げます。

る。なお、本稿は、潮田記念基金による慶應義塾博士課程学生研究支援プログラム補助金による研究成果の一部である。

【翻刻】

それ、わかつてうは神明の御めくみ、和光どうちんのけちえん、人として、たれか、これをしんせざらん。りしやう、いづれもろかならず、とは申せとも、中にも、すみよし大明神のえんきをは、うけたまはるに、まことにまことに、ありかたき御事なり。むかし、じんくう皇宮の御代にあたつて、かうらいこくより、三かんをもよほして、わかつてうをかたふけんかために、すまんそ（1オ）うのひやうせんにて、すてに、つくしのはかたのおきまで、をしきたるときに、くわうぐう、我朝を、三かんのために、うは、れん事を、かなしみ給ひて、すせんぞうのひやうせんを、もよほして、いこくのゑひすにむかはせ給ふ。

そのとき、武内左大臣木氏の宿ねを左將軍として、はつかうし給。さ大臣は、諸將のめいを（1ウ）つかさとり、さいかいの波上に、おもむかせ給ふ。されは、わかつてうの神く、てんせう大神をはしめとして、雲にぜうし、かすみにかくれて、后の御舟をは、しゆこし給ふとぞ、みえにける。

こゝに、すみよしの大みやう神は、ほんち天照太神と御一躰として、さうかいをつかさとり（2オ）、九州日向のくに、たちはなおどの浦に、すませ給ふか、かうらいこくより、わかつてうを、ほろほさんかために、多せいおそひきたる。しかれば、后宮、むかはせ給ふ御事を、しろしめして（2ウ）

「挿絵・第一図」住吉明神と神功皇后（3オ）

思しけるは、すてに、先帝、どくの矢にあたらせ給ひしかは、日ほんのいくさは、やふれにけり。このたひも、くわうぐうの御ちからにて、このゑひすをは、しりぞけたまはん事、おほつかなく、おほしめしけるにや。御ちからをそへさせ給はんかために、日向のくに、おどのうらより、一人のらうおうと（3ウ）げんしさせ給ひて、一ようのふねにとりのり、かいしやうに、うかひいてたまふときに、くわうぐうの御ふね、すてに、びせんのおきにつかせ給ふ。みやうじん、まちかく、こぎよせ給へは、后宮えいらんありて、「あれは、いかなるおきなぞ」と、御たつねある。



【第一図】

らうおう、こたへていはく、「我は（4オ）、このおきにて、つりをたる、おきななり。しかるに、いこくのゑひす、このにつほんを、かたふけんかために、たせい、すてに、きうしうまで、みたれいりぬ。されは、三か人をしりぞけて、まいらせんかために、后宮、はつかうまします。我、なみのうへをてうれんしつれば、なに事にても、ちよくめいをかうふりて、ちからをつけたてまつらん」と、のたま

ふ（4ウ）。くわうくう、えいかん、な、めならず、とはいへとも、「もし、いこくのえひす、はかり事のために、かやうにらうおうとげんして、御舟にちかつきける事もや」と、御うたかひおはしまして、さらに、御こ、ろをゆるし給はず。御神、ことわりに思しけるか、「なに事にても、あれかし、ちうせつをつくして、えいらんに（5オ）そなへ、二こ、ろなきむねを、しらしめはや」と、思しめしけるところに、や、しはらくありて、さうかいのそこ、どうようして、へきらう雲をうがち、すせんそうのふねとも、とうさいに、た、よふところに、なみのそこよりも、十四丈にあまりける牛のつのは、八かくにおいわかれたるか、かけて、きさき（5ウ）の御ふねを、くつかへさんとする。后宮、はしめたてまつりて、「いか、せん」と思しける所に、らうおう、み給ひて、「いさ、かも、さき給ふへからず」とて、海上へとひをり、さしもおひた、しき十丈あまりのうしを、両角をとつて、ねちかへし、大かいのそこへおしこみ給ふ（6オ）。

〔挿絵・第二図〕住吉明神が牛の角をつかまえる（6ウ）

それより、この所、一つの島となる。牛うし島となづけたり。きさき、大きにえいかん有て、か、るちうせつ、たくひなくそ思しめしにける。その、ち、后宮、仰られけるは、「このたひ、いくさの左將軍は、たけのうちの大臣、右しやうくんは、このおきなに給はるのあいた、事よろしく相はからふへき」とのせんしなり。其とき、おきな、せんしをかうふり給（7オ）へは、そうし申されけるは、「こんとのいくさに、三かんをほろほさんと思しめし候は、りうくう城のてうはうに干珠かんしゆ満珠

とて、二つの玉の候をからせ給は、弓箭にをよはす、そくしに、えひすをほろほし、天下は、をだやかに給ふへし」と、仰られければ、后宮、「いかんとしてか、りうくうのたからをはかるへきそ」と（7ウ）あやしみ給ふ。おきなはいはく、「こ、に、あんどのいそらとかうして、りうくうのつかひをじゆうにつかまするものあり。かのいそらをめして、仰つけられ候へ」と、そうし給へは、「いかにとして、そのいそらをめすへき」と、の給ふほとに、らうおう、のたまひけるは、「このものは、常（8オ）に、ぶがくをこのみ候へは、いそき、きがくをは、そうし給へ」と、仰られける。「それこそ、やすき事なり」とて、れうらんきんしうにて、ふねをかさり、やかて、ぶがくをそうせられける。あんのこどく、いそらは、

〔第二図〕

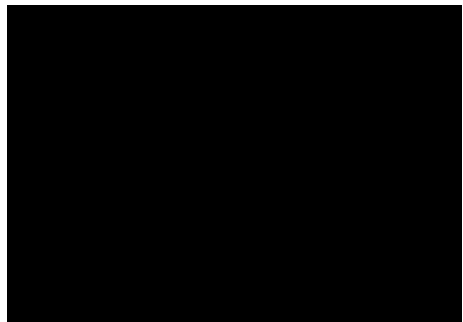
おもてにふくめんをたれて、なみの上に（8ウ）うかひいて、のがくをぞ、ちやうもんしたりける。おきな、の給ひけるは、「なにとて、なんちは、おもてにふくめんをたれて、まかりいつるぞ」と、のたまへは、いとつかしけにて、うちそばみるたり。らうおう、の給ひけるは、「后宮、仰らるへきむねある也（9オ）、ふくめんをとり

て、御まへちかくまいるへき」よしをそ、のたまひにける。いそらかいはく、「我らは、なみのそこにぢうして、藻くつにまどわれ、身には、かきみそを引うけ候へは、かたち見くるしくて、なか／＼、御目にかゝるへき（9ウ）ふせいならず」とそ、はぢらひける。おきなは、きこしめして、「それは、いさ、かも、くるしからず。なんちを、一天のあるし、たのみ思しめさるゝには、りうくうじやうのたからに、かんじゆ、まんしゆとて、二つの玉あり。このたまをかりて、（10オ）えさせよ、とのちよくちやうなり。いそき、とゝのへて、ちうせつにそなへよ」と、の給へは、いそら、うけ給はつて、「これはいか、と、そんなれとも、おきなを仰、おもければ、いかてか、いなみたてまつるへき」とて、それより、かいていへそ入に（10ウ）ける。くわうくう、御らんして、いとふしきなるものにそ、思しめされける。

さるほとに、いそらは、なみのそこへつと入て、りうくうに、まいりて、ことのよしをそ、つけたりける。りうわうは、これをき、（11オ）て、「さうかいのあるしの御所望といひ、国王のせんしなれば、いかてか、いなみたてまつらん」とて、すなはち、ふたつのほうしゆを、いそらにこそ、わたされける。ほとなく、かいしやうに、うかひいて、おきなに（11ウ）たてまつりける。みやう神は、よろこひ給ひて、后宮にこれをさ、け給ふ（12オ）。

〔挿絵・第三図：覆面のいそらと住吉明神（12ウ）〕

后宮、大きにえいかんありて、「このたひのいくさに、この人なくては、いかてか、その利をうくへき」と、あさからぬ事



〔第三図〕

にそ、おほしめしける。さるほとに、いこくのつわものともは、したひ／＼に、せめきたりて、ちくせん、ちくこのくに、（13オ）、せめいりけり。

さて、こうくうの御ふねは、夜を日につきて、いそくほとに、せんぢんは、すてに、ちくせんのちにもつきにけり。いこくのくんせいは、これを見て、「すは、日ほんの大将軍、むかふなり」とて、てつぐわんをはき（13）かけ、ゆみ、てつほうを、あめのごとくに、いかくるほとに、てんち、めいどうし、ぎやくらうは、雲をうかち、ときのごゑ、矢さげひのをとは、た、せかいも、くつるゝはかりにそ、見えたりける（14オ）。されとも、右將軍は、すこしも、さはき給はず、てきのかたへ、きりをふらし、くろき雲をたなびけて、た、ぢやうやのやみとなし給ふ。みかたの舟は、はくじつに、か、やくはかりに、みえわたりける（14ウ）。

さるほとに、右將軍は、かのまんしゆをとつて、てきのかたへなけ給へは、一時かあひたに、まん／＼とあるさうかい、いつくともなく、ひきてゆくほとに、あとは、た、へい／＼となる。すなはまにそ（15オ）なりにける。いこくのぐんせい

は、これを見て、「すてに、はや、じちいきほろふへき時節、たうらいしけるにや。りう神、ぢしんも、手をあはせて、大かいは、ほしきり、ひらちとなすこそ、めてたけれ(15ウ)」と、いさみけるか、すまんそうをは、なみのそこへ、ゆりすゑければ、「いさ、おり立て、うちとらん」とて、けんげきを手てに引さけて、うんかのこつく、いさみかゝる。右將軍、見給ひて、又、まんしゆを(16オ)、なけたまへは、四はう八めんより、うしほ、山のこづくに、みちきたりて、三かんのぐんせいとも、ひとりものこらす、そのみくつとそ成にけり。

后宮、よろこひ給ひて、「このついでに(16ウ)のつて、すくに、かうらいこくへ、おしわたりて、せむへき」よしを、せんしあるほどに、おきな、「しかるへし」とのたまひて、つしまのおきへそ、す、み給ふ。「これより、かうらいこくへは、一わたりにてほとちかし」といへとも、(17オ)おりふし、風のよこをふきて、たやすく舟のとをるへきやうなかりければ、うしやうくん、のたまひけるは、「こ、は、おきなな住所として、かせのこ、ろをよくしるなり」と仰られて、やかて(17ウ)、小舟にうちのらせ給ひて、おきを、はるかに、まねき給ひ、りうわうに、「風やむへき」よし、仰られければ、すなはち、くろ雲、しりぞき、かせも、はや、やみにけり。くんせい、は、よろこひて、われもくくと、おし(18オ)わたりけり。それよりして、このわたりを、住吉せと、はなつてたり。

さるほどに、后宮は、さまたけなく、かういきにいらせたまふ。「かうらいこくのつわ物とも、いくさには、うちまけて、そくはく、ほろほさる、(18ウ)のみならず、あまつさへ、わ

かくにへ、みたれいりぬは」とて、まうせいをそつして、かけむかひけり。右將軍は、御らんして、すなはち、せんちんありて、きめう、ふしきを、あらはし給ひて、そくはくのくんせいを、ほろほし給ふ(19オ)ほどに、かうらいこくのみかとは、やかて、かうさんしたまひける(19ウ)。

「挿絵・第四回…高麗国の帝が神功皇后に降参する」(20オ)につほんのやつこになるへきちきりをそ、なしにける。とき、后宮、うしやうくんにせんしありけるは、「もろこしには、いくさの法ありて、かたきをやふり、利をうけ、こくどをたやかなる(20ウ)法ありときく。ねかはくは、わかくにへ、これをつたへん」と、ちよくありければ、右將軍は、うけ給はり給ひて、やかて、みなみのかたなる山のなかはに、うちのそ

みたまひけるに、一人のらうおう、こつせんと(21オ)きたる。

#### 【第四回】

右將軍のいわく、「なんち、なにもものぞ」と、のたまへは、「我は、つねにまへは、しんたんこくにある李道王と云せんにななり。わは、しんたんこくにある李道王と云せんにななり。われ、三かを一時にかけて、いたらぬくにもなし。御身は、じちいきの(21ウ)しゆごしんとして、こんと、三かんのために、と



かいて、ことくく、てきをしたかへ給ふ。ゆ、しくこそはおほゆれ」と、申せは、右將軍は、きこしめして、「我くにのあるし、しんたんこくに、天帝よりも、つたはれるいてきを治する(22オ)法書ありと、き、たまふ。そのしよを、わかくにへ、つたへん事を、のそみ給ふ。いそき、そののそみをたつしてんや」と、おほせられければ、せんおう、うけたまはりて、「いか、あるへきとおもへとも(22ウ)、おきな仰、おもければ、ちからおよはず、まかりなん」とて、空をさして、とひ行けるか、三ときはかりありて、一くわんをあたふる。右將軍、よろこひ給ひて、ひそかに、えいらんありてのち、「このしよを、ほんけのともからに、あつかふならば、おそれある(23オ)へし」と、の仰にて、やかて、はいとそなし給ふといへり。

さるほとに、いくさ、さんして、后宮、わかてうへつきて、その、ち、右將軍は、后宮にむかはせ給ひて、「我は、すなはち、日向のくに、おどのうらに、住する神なり。わかくにのしゆこ神たるうへ、このたひいて、三かんをたいちせり。この、ちは、ゆくすゑはるかに(23ウ)、わかくにを、いよくまもるへし」と、の給ひて、その、ち、「我、住吉の神とけんして、さうかひをつかさとるへし。けふよりは、あまねく、衆生にりやくせん」と仰られて、けすることくに、うせ給ふ。后宮、まことに、ありかたく思しめして、「この神のちからならすは、このたひのいくさに、いかてか、そのりを(24オ)うくへき。さらは、いはあたてまつれ」とて、せんしうさかいのみきはに、住吉大みやう神といは、せ給ふ(24ウ)。

〔挿絵・第五図〕住吉社への参拝(25オ)

御やしろの正めんは、いこくのかたへ、なしたてまつる。されは、いくさ神なれば、とて、かすくのまつしやたちをは、

ぎよりんくわよくくに、いはあたてまつる。これ、すなはち、いくさのそなへを、かたとれる也(25ウ)。なみのうへ、舟のうち、風波のなんにあはん人は、このすみよしを、しんしたてまつるにおゐては、御りしやう、かうふるごと、うたかひなし。有かたかりける事とも也。我みても、ひさしくなりぬ、住吉のさしひめまつ、いくよへぬらん。(26オ)

〔第五図〕



(1) 『住吉の本地』の詳細については、二〇二三年六月二六日の説話

文学会大会において、『住吉の本地』における能《白楽天》説話—  
國學院大學蔵本の特徴と意義を中心に—と題して報告し、二〇二  
三年度に『説話文学研究』第五八号に論文化される予定である。

(そう・しゅんぎょう)